

西ドイツの教育事情とレーゲンスブルク大学の 学生生活について

藤井富美子

Über die Erziehungssituation in Bundesrepublik Deutschland und das Studententum an der Universität Regensburg

von Fumiko FUJII

はじめに

明治維新以来、今次大戦に至る間、近代化のために多くの日本人が欧米に留学した。これらの人々の努力によって日本の科学技術は進められ、その結果工業製品の中には今日世界の最先端のレベルにまで到達したものも少なくない。しかし当時の留学生は日本を代表するエリート的な一部の人々で占められ、一般国民には間接的にしか欧米事情を知ることはできなかった。そして短期間に表面的には欧米文化を日本に定着させるに到了。

今では日本人は旅行者を含めると、例えはパリだけでも数万人、ドイツのデュセルドルフには日本の会社、商社関係が家族ともども5,000人近く住んでいて、大きなコロニーを作っている。

私は1971年～1973年にかけて2年間西ドイツのレーゲンスブルクに滞在する機会を得、さらに本年（1979年）7月～8月再び当地を訪問することが出来た。その折りに学び得た西ドイツの教育、その他について報告したい。

なお、今回の訪独に際し、大学からの助成金に対し深く感謝する。

1. ドイツにおける小・中等教育

17～18世紀のドイツは貧困な農業国であり、領邦国家の君主は、絶対王制の維持と利益のために役立つ人間を育成するために、村落学校（Dorfsschule）を設立した。その後労働者階級の子弟のための宗教教育中心の民衆学校から産業学校（Industrieschule）が生まれ、「勤勉さへの教育」が施された。中学校としての実科学校（Realschule）は1700年頃から実際的有用性、手工業者や商人に直接役に立つ知識、技能を教授するための職業教育の機関として設立された。

1848年2月のパリ革命の波はドイツにも伝わり、教育の民主化と改善が進められ、ドイツの産業革命が、学校制度、とりわけ初等教育に及ぼした影響はビスマルクによる中等学校（Mittelschule）の設置という形で現われた。これは小学校と高等学校の中間的な性格をもつたものである。19世紀になると芸術教育なども民族固有の芸術を中心に呼ばれた。1919年のワイマール憲法では8年の民衆学校、18年までの補習学校における無償教育が示され、基礎学校（Grundschule）の上に中・高等学校が将来の職業の多様性を考えて設置された。また、ナチズムにより体育教育の重視策もとられた。

第2次大戦後は1945年6月の東西ドイツの分裂により、教育は別々に進められた。

1949年9月・10月にそれぞれドイツ連邦共和国(BRD)、ドイツ民主共和国(DDR)が成立している。

西ドイツではマーシャルプランに基づく、工業の育成、1950年以降軍需景気によって生産の向上がなされ、国力は伸張し、奇蹟の経済復興をなしたとされた。国民教育の前提となっていることに、①男子は18になると1年6ヶ月の兵役義務を負う（大学に入学すると延期することができる）②西ドイツの人口の96%はキリスト教徒で、教会税を所得税の1割近く納めており、教会の発言が強い、ということである。

西ドイツの戦後の学校教育は大別して2つの流れがある。その1つは、従来の制度で親の社会的、経済的地位によって生徒の進路を定める階級的学校で、6年制の基礎学校が土台となっている統一的学校制度をめざすものである。また他の1つは、従来の複線型学校制度で能力差や興味と合致したものだとして伝統的学校制度を保ち続けようとするものである。大多数の州では後者の考えに基づいて行なわれている。

伝統的学校制度では、基本的には4年制基礎学校(Grundschule)を終了したのち5年制国民学校高等科(Volksschule-oberstufe, Hauptschule)を卒業して徒弟として働きながら、週1～2日職業学校に3年通い、助手あるいは職人の資格試験を受けるもの、中級官吏、中堅幹部養成のための各種専門学校へ進学するコースの6年制中間学校(Mittelschule, Realschule)、へ進むもの、大学進学コースの9年制高等学校(Gymnasium)へ進むもの、3つのコースがある。(図1参照)

Gymnasiumには古典語タイプ、近代語タイプ、数学・自然科学タイプの3種がある。3～

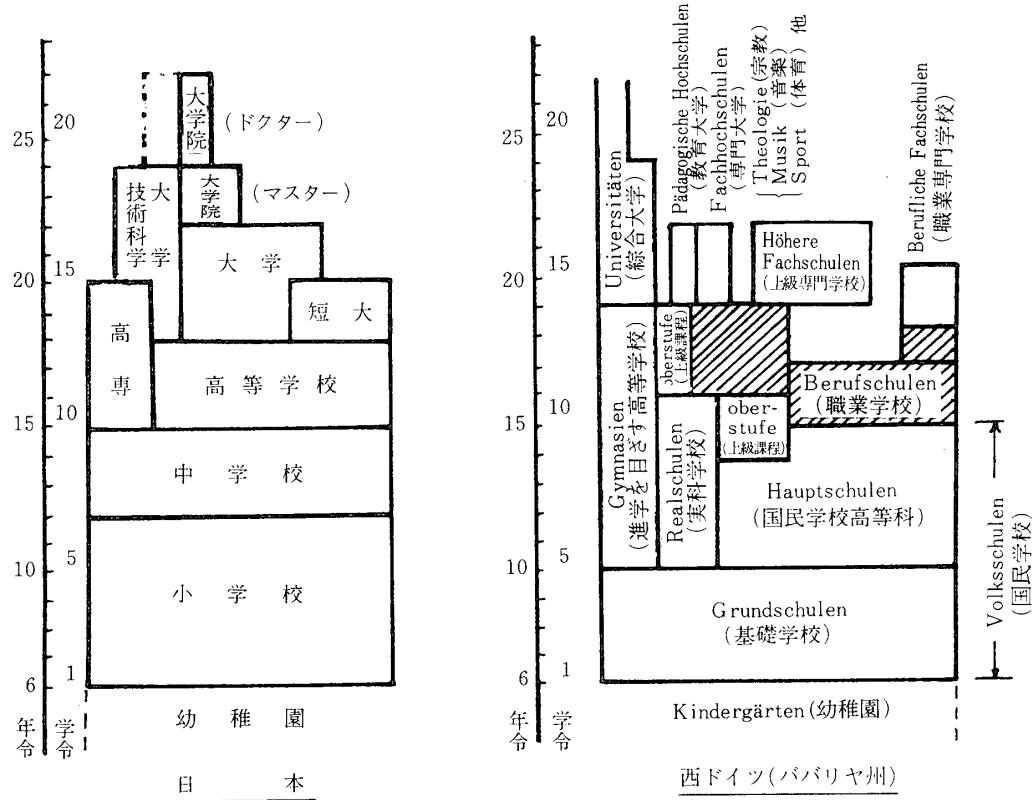


図1 両国における学校制度の構成図

6才までの子どもは幼稚園(Kindergarten)に通園することができ、当時は子供の34%が通園していた。

1970年には13才の生徒のうち66%は国民学校高等科 (Volksschule-oberstufe, Hauptschule), 16% が中間学校 (Mittelschule, Realschule), 18% が将来大学進学を目的とする高等学校 (Gymnasium) で、大学進学率は10%程度であった。

国民学校は朝7時30分から12時30分までで、午後の授業はほとんどなく、午後は家庭教育のために考えられており、9年後にアビトア (Abitur, Reifeprüfung 高等学校卒業資格試験、これに合格すると大学入学資格が得られる。) があるGymnasium でさえ午後の授業は週2~3時間であり、時間的には自由が多い。しかし最近では平均学力の低下や、大学入学希望者が多くなつたために以前のように自由に大学の希望する学科に入れるのではなくなつたが、日本のように学習塾やPTA組織はない。

戦前は各州の統一がとれていなかったが、州間の連絡をよくするため「諸州文部大臣会議」(1949), 「学術審議会」(1957), 「教育審議会」(1965) が設置され教育諸政策と将来計画の策定や実施などを把握することになった。さらに、1970には「連邦各州教育計画委員会」が設置され、具体的な活動がなされている。

また、現在の西ドイツには「マイスター制度」と呼ばれるものがあるが、これは9年間の義務教育を終えたものが週1~2日職業学校に通いマイスター（親方）の資格を取得する制度である。この制度はドイツの大学、研究機関の装置作成などを研究・実験の面で大きな支えとなつておる、日本ではみられないものである。

日本はアメリカの占領下で、米国西部の六三制を規範とした6・3・3・4制を採用したが、ドイツでは厳然として伝統的教育制度を固守し、独立に進めている点は注目される。

2. 西ドイツにおける高等教育

ドイツの科学研究および高等教育は、神聖ローマ帝国時代にハイデルベルク (1386年) とケルン (1388年) に大学が設立された。

さらに今夏訪問したドイツ南部の美しい町フライブルクの大学は1457年に創立されたものである。ルネサンスと自然科学の発展に伴ない教会から独立し、産業革命前期に新しい学問の理想が示され、ベルリン大学 (1809年)、ブレスラウ大学 (現在東ドイツ、1811年)、ボン大学 (1817年) が設立された。ここでは純粋な学問研究の自由と大学移動の自由がうたわれ、ドイツの科学研究の伝統的基礎が固められた。

ドイツには古典的総合大学として1386年創立のハイデルベルク大学をはじめ全国に約30の大学があり、そのほとんどは工学部以外の学部からなつていて。(図2参照)

1967年に新設されたウルム大学は現在自然科学と医学部のみである。アーランゲン大学 (1745年) とニュルンベルク大学 (1847年) には1967年に工学部が新設された。

工科大学は現在9校で、そのほか単科大学としてデュセルドルフの医科大学アカデミー (Medizinische Akademie), ハノーファーの獣医科大学と医科大学、シュトゥットガルト、ホーヘンハイムに農科大学、マンハイムに経済大学など合計18校ある。西ドイツの学生達の専門別学生の相対数を示すと表1のようになる。

レーゲンスブルク大学はバイエルン4番目の総合大学で1954年に創設された非常に近代的な大学であり、神学、法学、経済学、文学、哲学等の他、自然科学、医学 (現在ではVorklinikum) の学部をもつていて。レーゲンスブルク大学の学部学生数を示すと表2の通りである。

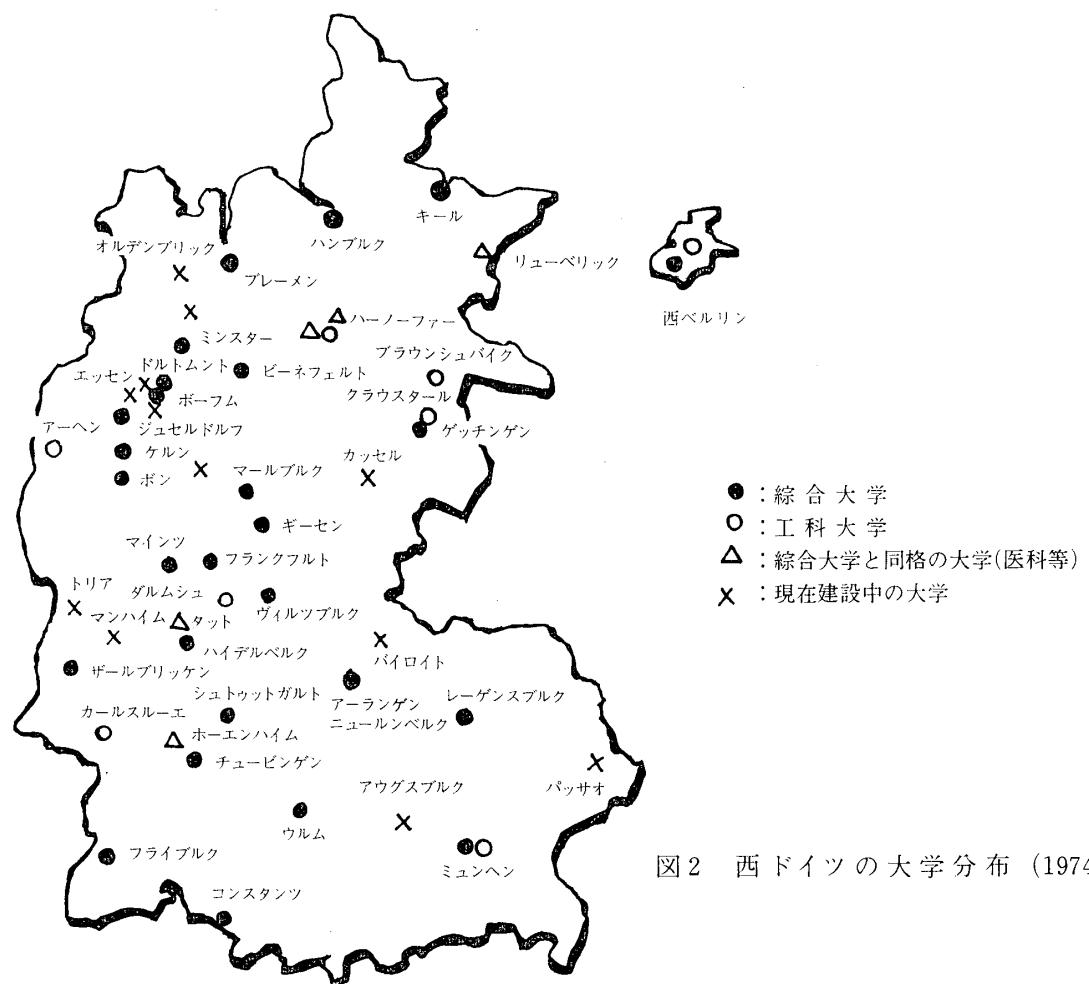


図2 西ドイツの大学分布 (1974年)

表1 大学および技術学校における学生数の割合

大学の種別	冬学期	1000人当たりの総数	その中1000人当たりのドイツ人学生数	その中(%) 女子学生
科学系の大学	1965/66	254	232	21.2
	1968/69	288	266	22.8
	1971/72	376	349	25.0
教育大学	1965/66	45	45	61.6
	1968/69	65	65	63.8
	1971/72	61	90	59.8
芸術・音楽・スポーツ大学	1965/66	9	8	41.4
	1968/69	9	8	41.7
	1971/72	12	11	38.9
大学総学生数	1965/66	308	285	28.2
	1968/69	362	339	31.1
	1971/72	478	449	32.7
技術学校 (1969年以後は専門大学)	1965/66	61	58	1.3
	1968/69	63	60	1.6
	1971/72	119	114	14.0

表2 レーゲンスブルク大学における1970/71冬学期の学生総数

主 専 攻 (学部・学科)	ドイツ人		外国人及び無国籍		小計		合計
	男	女	男	女	男	女	
入学手続をした学生							
カトリック宗教学	211	25	25	2	236	27	263
一般 医 学	49	18	2	1	51	19	70
法 学	598	63	5	—	603	63	666
経 済 学							
a. 経営学コース	606	53	16	—	622	53	675
b. 経済学コース	193	47	6	1	199	48	247
人 文 学 (哲学・心理学・教育学・歴史学・人文科学・音楽論・その他)	320	180	10	14	330	194	52
語 学 (古典語学・近代語学・ドイツ語学)	544	400	9	25	553	425	978
自然 科 学	185	23	3	2	188	25	213
合 計	2706	809	76	45	2782	854	3636
聴 講 生	62	23	9	7	71	33	104

小・中学校教員養成の6ゼメスター(3年)の教育大学が各地に113校ある。その他、Diplom授与権のある政治大学が5校、体育大学が2校、その他専門大学として神学大学、音楽大学、美術大学がある。

大学の教育行政は文教自治権として各州にあり、管理制度は州政府と大学との間で協議し、文部省が定める規定によって決定される。また、市民には市民大学(Volkshochschulen)とか公開講座が夜間開かれたりしている。1960年には学生の5%だけが労働者階級の子弟であったのが現在は17%に増加しており、高等教育の機会均等にも力が入れられている。次にレーゲンスブルク大学に学ぶ学生の家庭の状況を表3に示す。

また、最近では外国人との友好に、教育文化の面でも力を入れている。レーゲンスブルク大学に入学許可されている留学生を国籍別にみると表4に示す通りである。

表3 学生の親の職業 (1971年冬学期)

父 親 の 職 業	学 生 数	割 合 (%)	父 親 の 職 業	学 生 数	割 合 (%)
自由業	460	13	サラリーマン		
商業	430	12	管 理 者	425	12
農業	220	6	そ の 他	470	13
官吏			実務責任者	36	1
中央官吏	300	8	労 働 者		
高級官吏	310	9	単純労働者	171	5
中級官吏	210	6	知能労働者	106	3
下級官吏	54	1	補助労働者	44	1
停 年	135	3	その他の職業	55	1
			年金給与者	210	6

表4 国籍別入学手続済の外国人学生数 (レーゲンスブルク大学 1972年)

国 種	学 生 数	国 種	学 生 数
1. ヨーロッパ各国		2. ヨーロッパ以外の国	
ベルギー	2	ブラジル	1
デンマーク	1	チリ	2
イギリス	5	台湾	1
フランス	7	ガーナ	1
ギリシャ	10	イングランド	1
オランダ	2	イラン	1
アイルランド	1	日本	3
ユゴースラビヤ	1	ヨルダン	1
イタリヤ	5	カナダ	2
ノルウェー	3	コンゴ(ブラスビル)	1
オーストリー	9	韓国	7
ポルトガル	1	リビヤ	1
スイス	5	パラグアイ	1
スペイン	3	ペルー	1
チェコスロバキヤ	1	チュニジヤ	1
ハンガリー	4	米国	31
		3. 無国籍	5
外国人および無国籍学生総数		121	

西ドイツの大学では授業料は免除されており、奨学金は最高500マルク程度まで与えられ、その額は親の収入によって違っている。

大学の食堂 (Mensa) は日本に比べてかなり立派なものであり、学生に対しては州政府から援助が出ている。(教員、職員にも補助が出る。)

3. レーゲンスブルク大学での生活

ドイツ留学生活で、ドイツ社会での経験はその後の私の生活に非常に役立っている。生活の中で学んだことは、体験した時代や立場、環境によって異なる。私の滞在したレーゲンスブルクは、ミュンヘンから北へ約100kmのドナウ河沿岸にあり、ドイツの各地にみられる伝統的な古い街の一つである。街の中央には12世紀の頃に建てられたゴチック風の教会の双塔 (St. Jakobkirche) がそびえ、街の中をドナウ河がゆうゆうと流れ、そこへレーゲン川が合流している。

大学はこの旧市街から約2km位離れた所に全く新しく創設された。当時この大学に学ぶ学生的出身地別の分布をみると表5の通りである。

市内には古くからの神学大学があり、新しく出来た大学の建物とは対照的であった。

現在は新しいキャンパスに合併されていた。神学部をもつレーゲンスブルク大学の学生の宗教別分布をみてみると表6の通りである。

新しい大学のキャンパスの近くには教育大学があり、ここ的学生達はレーゲンスブルク大学の図書館や食堂を自由に使うことが出来、学生間の交流はさかんであった。

表5 ドイツ入学生の出身地別学生数 (レーゲンスブルク大学1972年)

出身地	学生数	出身地	学生数
レーゲンスブルク市内	500	ブ レ ー メ ン	10
レーゲンスブルク郊外	130	ハ ン ブ ル ク 州	15
オーバーパーファルツ (レーゲンスブルク管轄の郡部)	600	ニーダーザクセン州	77
ニーダーババリヤ	710	ヘ ッ セ ン 州	55
オーバーババリヤ	495	ノルトライン・ウェストファーレン州	204
その他のババリヤ	445	ラインラント・プファルツ州	40
バーデン・ヴィテンベルク	187	ザ ール ラ ン ド 州	9
ベ ル リ ン	16	シュレーヴィッヒ・ホルスタイン州	22

表6 学生の宗教所属別 (レーゲンスブルク大学1972年)

宗派別	学生数	宗派別	学生数
ローマカトリック	2616	ギリシャ正教	14
新 教	870	そ の 他	32
ユダヤ教	3	無 宗 教	98
モスレム教	3		

ドイツでは大学も朝が早く、7時30分～8時頃までには仕事を開始し、正午きっかりに連れ添って大学の食堂 (Mensa) にゆき、その後街へ出かけたりして2時頃まで話を交わして昼休みの時を過ごす。その後2時～5時まで研究をするという非常にゆったりした、落ち着いた生活である。土・日曜日は大学も休みになり、一般学生は建物の中には全く入れなくなり、鍵の与えられている一部の者だけ休日も学校を利用することができる。日本の習慣が身についている私などはよく土曜日の静かな大学へ出かけたものである。

また、大学は冬ゼメスター（10月～2月）と夏ゼメスター（4月～7月上旬）の二期制であるが、日本のように入学式があって、一斉に学生を受け入れるわけでもなく、卒業式があって一斉に学生が卒業していくわけでもない。ドイツの大学は学問を修める場である意識が徹底しているので、自分で納得する期間在学しているようである。西ドイツの大学および工科大学における平均就学期間の推移をみると表7の通りである。

多くは5～6年位在学しているようである。大学は就職を斡旋する機関ではないので、自分でみつけてぼつぼつ就職していく。

学生は成績簿をもっており、単位の修得ごとに教授のサインと成績(1.2.3.4.5の5段階、ただし1が成績優秀、5が落第で日本と逆)を記入してもらう。しかし非常に厳格なところがあって、4ゼメスター終了時に行なわれる中間試験を二度つづけて落第すると退学処分を受ける。

大学課程の修了はジプローム (Diplom) であるが、入学生の5分の1程度であり、多くはその前期段階 (Vordiplom) で出てしまう。ジプロームを取得するには10～12ゼメスター必要とし、印刷した論文と筆記および口頭試験に合格しなければならないので、日本の修士（マスター）と同等の重さをもっている。

表7 総合大学および工科大学における平均的学習期間の伸展 (西ドイツ)

専門分野	平均的専門学習修得の学期数 (試験学期を除く)		
	1960年	1963年	1965年
全専門分野	9.7	10.4	10.8
その内			
・高等学校(ギムナジウム)の一般教育科目の教員採用国家試験	10.3	11.4	11.8
・人文科学	8.3	9.2	9.5
・法学	9.0	9.9	10.1
・経営学	—	9.5	9.8
・一般医学	11.3	11.4	11.6
・数学(ジプローム試験)	12.0	12.2	12.3
・物理学(ジプローム試験)	12.6	12.8	13.1
・化学(ジプローム試験)	12.9	12.3	12.5
・建築・土木工学	11.5	11.7	11.5
・機械工学	10.6	11.4	11.7
・電子工学	11.1	11.5	11.5

ドイツでは大学課程修了の××学士という称号が今でも社会に立派に通用している。大学では進級試験に合格したり、ジプロームあるいは学位(Doktor)を得たり、誕生日を迎えると身近な同僚を呼んでビールやワインでパーティを催す習慣がある。夜8時から夜中の12時過ぎまで夫婦そろって出席する。

学生の中にはかなりの妻帯者がありその様子を表8に示す。

祝福される方が、ポケットマネーをはたくのは日本のものとは逆のようである。

幸いなことに、私の滞在中に研究室の助手の人の結婚式に招かれた。前夜祭に新婦の家の前で皿を勢いよく地面にたたきつけて割る面白い風習に出会った。物を大切にする僕約家のドイツ人には珍しいことである。

ドイツ人は森を散歩することが好きで、研究室から年に2~3回ハイキング(Fußausflug)が行なわれた。また、学部単位でクリスマスパーティー、ファツシングの会などが開かれ、大学の広い一室を美しく飾ってローソクのあかりのもとで、ビール、ワインとソーセージやステーキで開かれ、あまり大金を使うことなく健全な楽しみ方をする。

冬ゼメスターの終りが近づくと、姉妹校を結んでいるアメリカのコロラド州立大学とフランスのリオン大学の交換留学生対象にドイツ国見学のゼミナールが開かれる。私もこの企画に特別参加が許され、西ベルリン1週間のゼミナール旅行に加わった。ドイツの誇るアウトバーンをホーフから東ドイツ内を一路北へ走り、ベルリンに滞在する。一日目はチャーリー検門を通って東ベルリン見学が行なわれた。バスには東ベルリン市からさしまわしの中年の婦人案内人が乗り込み、東ドイツの実情を説明してくれた。ゼミナール中、午前は講習会で、先に述べたような教育制度などの講話があり、午後はオペラ鑑賞会(ホフマン物語を見る。)のようなも

表8 学生の基本生活 (レーゲンスブルク大学1972年)

独身	3286	配偶者死別	2
既婚	338	離婚	10

り沢山のプログラムが組まれていた。宿泊したホテルはバス、トイレのあるとてもいいところであり、もちろん参加費用は全部大学が負担してくれた。

郊外を走るバスから見る景色は林と教会の尖塔を中心にした村落が見えかくれするたんたんとしたものであった。

おわりに

ドイツは日本とともに第二次世界大戦に敗れ、戦後の困難をのり越えて今日の経済的繁栄を築きあげた。このような事情から日本人とドイツ人の質実剛健とか勤勉性とか共通の国民性は世界の注目を集め、大いに論じられてきた。しかし、国民性とは歴史や伝統につちかわたるものであるから、当然両者間にはものの考え方、生活信条には根本的相違がある。例えば第一次オイルショックの際の両国民の対処の仕方を見ても明らかで、石油やトイレットペーパーを買いあさったことはドイツでは見られなかったそうである。週末のドライブが禁止され、アウトバーンを走る車は一台もなく、ドライブをやめてじっと我慢したと聞く。これも第一次大戦後、ドイツの味わった経済的破壊を二度と繰り返してはならないという全国民の同意が働いたためであろう。

教育制度に関しては、戦後日本はアメリカの6・3制を導入したが、西ドイツでは旧来の制度を固守した。その結果、日本では中等教育を義務教育のレベルにし、幾百の大学が創設されて、高等教育を特定のエリート養成機関から一般教育の場に開放した。これによって国民の教育レベルは著しく向上したことは疑う余地もなく、それが今日の日本の経済的繁栄の底力になっていることは否定出来ない。

一方、西ドイツでも時代に即して教育制度の手直しは行なわれているものの、大学数はおよそ40程度であり、卒業生の職業もアカデミックなものに限定する意識が強い。そして国力を支える大部分は世襲制に根ざすマイスター制度に委ねられている。しかし今日の西ドイツでは大学進学の希望者が急増し、大学の門が狭められ、日本のような入試制度が考えられたこともある。また、大学で学問を修めても希望するような職業につく機会が少なくなっている。これが大きな要因となって若人の不満がつのり、社会的不安をひきおこしている。両国が戦後採った教育制度のいずれが良かつたかの解答が出るにはもう少し時間を要するであろう。

引用文献

- 1) Personen- und Vorlesungsvzeichnis an der Universität Regensburg, Ausgabe des Sommersemesters 1971, s. 202-205
Buchhandlung F. Pustet, Regensburg (1971)
- 2) Tatsachen über Deutschland s. 388-395, Presse und Informationsamt der Bundesregierung, Bonn (1974)